



**札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor***

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	小学6年生に行った喫煙防止教育の効果;加濃式社会的ニコチン依存度調査票(小学校高学年市原版)KTSND-youthを用いた質問紙調査より
Author(s)	今野, 美紀;浅利, 剛史;蝦名, 美智子;田畑, 久江;谷口, 治子
Citation	札幌保健科学雑誌,第1号:97-104
Issue Date	2012年
DOI	10.15114/sjhs.1.97
Doc URL	<a href="http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/5392">http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/5392</a>
Type	Technical Report
Additional Information	
File Information	n2186621X197.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

報告

## 小学6年生に行った喫煙防止教育の効果；加濃式社会的ニコチン依存度調査票 (小学校高学年市原版) KTSND-youthを用いた質問紙調査より

今野美紀<sup>1)</sup>、浅利剛史<sup>1)</sup>、蝦名美智子<sup>1)</sup>、田畑久江<sup>2)</sup>、谷口治子<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 札幌医科大学保健医療学部

<sup>2)</sup> むらしたこどもクリニック

<sup>3)</sup> JR札幌病院保健管理部

本研究の目的は、小学校6年生を対象に喫煙防止授業を行い、授業前・授業直後・3か月後の知識と認知の変化から教育の効果を明らかにすることである。北海道内A市公立小学校2校の6年生に筆者らが授業を行い、質問紙による教育評価を行った。授業前134名、授業直後136名、3か月後136名の有効回答を解析した。その結果、知識では、受動喫煙の影響、依存性、運動・学習への影響の正答者の割合は授業前に比べ3か月後に有意に高くなった。認知では、高得点ほどタバコに対して心理社会的依存を示すKTSND-youthの得点において、授業前の総合得点中央値は4.00、授業直後 3.00、3か月後 3.50となり、3群間で有意差を認めた。そして、多重比較にて授業前と授業直後の群間に有意差を認めた。授業直後は知識を得たことにより児童の認知が変化したと推察された。しかし時間経過と共に授業前の状態になっていくことから、家庭・学校と連携した喫煙防止教育の必要性が示唆された。

キーワード：小学校6年生、喫煙防止、教育効果、加濃式社会的ニコチン依存度調査票

### Effects of Anti-smoking Class Given to Sixth grade elementary school children: Findings of Questionnaire Survey Based on Kano Test for Social Nicotine Dependence for Youth

Miki KONNO<sup>1)</sup>, Tsuyoshi ASARI<sup>1)</sup>, Michiko EBINA<sup>1)</sup>, Hisae TABATA<sup>2)</sup> and Haruko TANIGUCHI<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> School of Health Sciences, Sapporo Medical University

<sup>2)</sup> Murashita Children's Clinic

<sup>3)</sup> Health Administration Department, JR Sapporo Hospital

This study was undertaken to find out the effects of an anti-smoking class offered to the sixth grade children at elementary schools on their understanding of and perception about smoking. The authors visited two elementary schools in Hokkaido Prefecture to give an anti-smoking talk. The children were asked to fill in a questionnaire containing smoking knowledge quiz and Kano Test for Social Nicotine Dependence for Youth (KTSND-youth) questions, before, immediately after, and three months after the talk. 134 valid replies returned before the talk, and 136 each immediately after and three months after the talk, were subjected to analysis and comparison.

The ratio of correct answers to the questions regarding the influence of passive smoking, dependence, effects of smoking on sports and study was significantly higher three months after the talk than before. The median of the KTSND-youth score, an indicator of psychological dependence on cigarettes, was 4.00 before, 3.00 immediately after, and 3.50 three months after the class, a significant difference being shown among each group and between before and immediately after the class. The findings suggest the children acquired correct smoking knowledge from the talk, which helped correct their distortion in perception immediately after the class, but the effects waned with the passage of time. In order to address this issue, the school and families should work together in giving anti-smoking lessons to children.

Key words : Sixth grade elementary school children, anti-smoking, educational effects, Kano Test for Social Nicotine Dependence for Youth

Sapporo J. Health Sci. 1:97-104(2012)

## 1. はじめに

タバコの規制は世界的な潮流であり、わが国でも成人の喫煙離れが進み、中学生・高校生を対象とした4年毎の全国調査においても喫煙経験率が低下している<sup>1)</sup>。望ましい傾向であるが、小児の喫煙のきっかけが友人・兄弟のみならず保護者からの勧めで始まることもあり<sup>2)</sup>、問題である。こうした青少年の喫煙対策の一つとして学校ベースの喫煙防止教育<sup>3)</sup>があり、一定の効果を報告している。わが国でも平成14年度から学習指導要領に小学校6年生での喫煙防止を指導することが明記されており、各校で取り組まれている。学校における喫煙防止教育は、学校内の敷地内禁煙<sup>4)</sup>といった環境対策とあわせ青少年の喫煙行動の抑制に貢献している。しかし、小児を対象とした喫煙防止教育の効果を測る際、対象者の中には喫煙経験がない者が大勢含まれているゆえ、行動の変化を教育評価指標とするには限界があり、講義直後の小児の認知的変化から教育評価が試みられている<sup>5)-7)</sup>。また、教育後の評価は、教育直後の認知<sup>5)-7)</sup>、数年後の喫煙行動<sup>8) 9)</sup>を検討したものがみられたが、新たに学んだことが日常生活を送る中でどう認知が変わったのか、数ヵ月たった後の変化を評価したものはみられなかった。今回、筆者らは小学校6年生に喫煙防止教育を行い、小学生の認知レベルに合わせた標準化された質問紙を使用して、その効果を検討したので報告する。

## 2. 研究目的

小学校6年生を対象に喫煙防止授業を行い、授業前・授業直後・3か月後の彼らの知識と認知の変化から教育の効果を明らかにすることである。評価時期を3か月後と設定した理由は、学期の単元評価の時期に合ったためである。

## 3. 方法

- 1) 対象：北海道内A市にある公立小学校2校（B校、C校）6年生各2クラスである。
- 2) 調査期間：平成22年11月～平成23年3月
- 3) 授業の流れと評価：時間は総合学習時間の1単元45分内で、2クラス合同授業として筆者らがB校、C校で行った。授業の流れ、授業の評価（質問紙調査）の時期、内容は表1に示した。今回は、B校、C校側から筆者らへの喫煙防止教育の依頼であったため、教育効果を検討する方法は授業前後で比較した。タバコに対する知識は有害性、受動喫煙の影響、依存性、運動・学習への影響を問う4項目を「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。タバコに対する認知は加濃式社会的ニコチン依存度調査票小学校高学年市原版Kano Test for Social Nicotine Dependence for Youth（以下KTSND-youthとする）で評

価した。これは喫煙を美化、正当化し、害を否定する、誤った思い込みを定量化する（10項目、4段階評価、0～30点）質問項目からなり、高得点ほど心理的依存状態にあると評価される<sup>5) 6)</sup>。質問紙の配布は担任教諭が行い、回収箱の封筒は養護教諭が2クラス分とりまとめて筆者の元へ郵送し、回収された。

- 4) 分析：SPSS for Windows ver17.0を用いて、2校の属性（性別、周囲の喫煙者の割合）に有意差がないことを確認したあとで2校をまとめて教育効果を検討することにした。その際、調査時期を説明変数、喫煙知識とKTSND-youthを目的変数とし、喫煙の知識はカイ2乗検定を行った。そしてKTSND-youthは中央値、四分位（25%タイル、75%タイル）を求め、調査時期別にKruskal Wallis検定し、有意差があった場合Mann-Whitney検定で多重比較した。授業の感想は調査時期別に類似した内容にカテゴリー分けし、研究者間で検討した。
- 5) 倫理的配慮：筆者所属先倫理委員会にて承認を得た後、学校長、養護教諭に調査趣旨を文書で説明し、学校長から文書にて同意を得た。担任教諭を介して保護者・児童に調査趣旨を文書で説明した。調査は無記名で、調査参加は任意であること、回答後は封筒に入れて回収箱へ各自投函すること、結果は学会等で公表する等を文書に示した。

## 4. 結果

対象は143名（B校77名、C校66名）であり、授業前138名（B校75名、C校63名）、授業直後139名（B校73名、C校66名）、3か月後138名（B校73名、C校65名）から回答があった。回収率は授業前96.5%、授業直後97.2%、3か月後96.5%であった。このうち、KTSND-youth 10項目全てに回答していないものをデータから除いた。授業前134名、授業直後は136名、3か月後は136名の回答を有効回答とした。

- 1) 対象の特性：授業前の回答より、性別は男子72名（53.7%）、女子60名（44.8%）、無回答2名（1.5%）であった。周囲に喫煙者がいる者94名（70.1%）、いない者38名（28.4%）、無回答2名（1.5%）で、内訳（複数回答）は、父親60名（63.8%）、母親40名（42.6%）、祖父27名（28.7%）、祖母11名（11.7%）の順であった。3か月後の回答では、周囲に喫煙者がいる者84名（61.8%）、いない者46名（33.8%）、無回答6名（4.4%）で、内訳（複数回答）は、父親56名（66.7%）、母親40名（47.6%）、祖父32名（38.1%）、祖母13名（15.5%）の順であった。
- 2) タバコに対する知識：結果を表2に示した。授業前でもタバコの有害性は殆どの者が知っていたが、受動喫煙の影響、依存性については正答者の割合は9割を下回り、運動・学習への影響について知っている者は7割未満であった。しかし、3か月後、有害性は100%、その他3項

表1. 授業の流れと評価

授業のねらい		
1. タバコが心身の健康に及ぼす影響について児童が正しい知識をもつ 2. 児童がタバコを避ける態度をもつ		
時 間	活 動 内 容	備 考
授業当日 ホームルーム	評価1；授業前質問紙調査 属性；性別、周囲の喫煙者の有無、タバコに対する知識、KTSND-youth	
授業時間配分	講義 ・アイスブレイク；自己紹介、本日の講義テーマの確認「タバコは子どもの問題」	喫煙者のうち、喫煙開始年齢は20歳までの人が大半であり、タバコは子どもの身近な問題であることを動機づける。
2分 18分	演習 ・「広告の罠」：若年者をターゲットとしたマーケティング戦略を考える ・「依存症の仕組み」；児童に今、大事なものを挙げてもらい、依存症になると大事なものの優先順位が、依存物質が最優先となることに気づく	
22分	講義 ・タバコの真実の姿 「健康影響；海外タバコパッケージ、海外禁煙推進CMビデオ、タール模型、運動・勉強・美容への影響、受動喫煙の問題」 ・タバコの断り方の例示 ・禁煙治療の紹介：治療に訪れた未成年事例の紹介、治療薬の紹介、禁煙外来患者から児童へのメッセージ	一般的にタバコの効用と信じられているものに対して、本当か否か判断できるエビデンスを提示する。
3分	演習 ・禁煙の勧め方の例示；喫煙者は筆者ら講師が学校教諭が、子ども役は児童が担い、代表児童が禁煙を周囲の人に勧めるシナリオを皆の前で読む	喫煙者役は児童に行わせない。児童が喫煙に携わることを強化せず、他者に禁煙を促すことを強化するため。
授業終了後、同日	評価2；授業直後質問紙調査 KTSND-youth、授業の感想	調査（評価1）してから時間的経過が僅かゆえ、対象集団の属性が殆ど変化しないため、質問項目から除く。また、授業直後は正答率が増すため（文献10で報告、一部未発表）、質問項目から除く。
同日～翌日	禁煙をすすめるシナリオの配布 資料1 担任教諭より3種類を6年生児童に配布してもらう	
授業終了後 3か月	評価3；3か月後質問紙調査 属性；性別、周囲の喫煙者の有無、タバコに対する知識、KTSND-youth、授業の感想	

目は9割以上の者が正答であり、この3項目の正答者の割合は授業前と3か月後で有意差を認めた。

3) タバコに対する認知：KTSND-youthの得点（表3）において、授業前の総合得点中央値（25%タイル、75%タイル）は4（2, 8.25）、授業直後 3（0, 5）、3か月後 3.5（1, 8）となり、Kruskal Wallis検定で有意差をみとめた（ $p < 0.05$ ）。多重比較では、授業前と授業直後の間で有意差を認めた（ $p < 0.01$ ）。

4) 授業直後と3か月後の感想：授業直後には130名（97.0

%）、3か月後は89名（65.4%）が授業の感想を記述した（表4）。両者に共通して【授業内容が印象に残る】、【タバコ関連の知識が増える】、【タバコに対する誤解に気づく】、【タバコを避けたい思いをもつ】が示された。カテゴリ内の内容は授業直後に多様であった。概ね肯定的な反応が得られたが、「あまり禁煙と言わない方が良いと思う」と【禁煙に抵抗する思いをもつ】を示した者もいた。

資料 1. 禁煙を勧める方法の演習シナリオ

**禁煙をすすめる練習をしてみよう！**

**禁煙をすすめるコツ**

- 1) 怒ったり、ふざけたりしないで、**冷静**に話す
- 2) 相手を**心配**していることが伝わるようにする
- 3) 禁煙するとおこる“よいこと”を**教えてあげる**
- 4) 禁煙する“**具体的な方法**”を**教えてあげる**
- 5) 禁煙を**応援**する気持ちを伝える

**\*練習シナリオ\***

喫煙者役：講演講師または学校の教諭（大人）

わたし役：授業を受けた児童・生徒

**おじいちゃん編**

おじいちゃん：「タバコの授業で、どんなことを聞いてきたんだい？」

わたし：「タバコを吸うと、がんとか、いろんな病気になるし、周りで煙を吸う人も病気になりやすいんだって。」

私は、おじいちゃんが病気になるのが心配だから、禁煙して欲しいと思ったよ。」

おじいちゃん：「タバコは身体には悪いけど、吸うとストレス解消できるんだ。」

わたし：「タバコを吸う人は、タバコのニコチンが切れてくるとリラックスできなくなって、

ストレスを感じるんだって。」

禁煙するとニコチン切れのストレスがなくなって、ストレスは減るんだよ。」

おじいちゃん「そうか、ストレスが減るならやめたいけど、タバコをガマンするのはつらそうだなあ。」

わたし：「病院の禁煙外来で、貼り薬や飲み薬を使いながら、楽に禁煙できる方法があるんだよ。」

病院に禁煙外来があるから、おじいちゃんも行ってみたら？」

おじいちゃん：「飲み薬もあるとは、知らなかったな。」

わたし：「禁煙した人は、セキも出ないし、息ぎれもしなくなるよ。」

タバコ代もいらなし、病気や火事の心配もなくなって、家族みんなからよろこばれるんだって。」

おじいちゃんが禁煙したら、私もうれしいよ。」

おじいちゃん：「孫からそう言われたら、おじいちゃんもがんばろう。」

表 2 タバコに対する知識

設 問	授業前 回答者数(%)	3か月後 回答者数(%)	<sup>2)</sup> 検定 p値
タバコの有害性 「タバコに害があることを知っている」	はい 130 ( 97.7) いいえ 3 ( 2.3)	134 (100.0) 0 ( 0.0)	0.122
受動喫煙の影響 「タバコの煙を吸った人にも害があることを知っている」	はい 117 ( 88.0) いいえ 16 ( 12.0)	131 ( 97.0) 4 ( 3.0)	0.005
依存性 「タバコがとともやめにくいことを知っている」	はい 114 ( 85.1) いいえ 20 ( 14.9)	129 ( 94.9) 7 ( 5.1)	0.008
運動・学習への影響 「タバコが運動や勉強に悪いことを知っている」	はい 93 ( 69.9) いいえ 40 ( 30.1)	124 ( 91.2) 12 ( 8.8)	<0.000



表3 KTSND-youth 得点の変化

項目	授業前	授業直後	3か月後	p値
1) タバコを吸う人は、やめたくてもやめられないでいると思う。	0.00 (0.00, 1.00)	0.00 (0.00, 1.00)	0.00 (0.00, 1.00)	**
2) タバコを吸うことは大人っぽくてかっこいいと思う。	0.00 (0.00, 0.25)	0.00 (0.00, 0.00)	0.00 (0.00, 0.00)	
3) タバコはお茶やコーヒーのように味や香りを楽しむためのものだと思う。	0.00 (0.00, 1.00)	0.00 (0.00, 1.00)	0.00 (0.00, 1.00)	
4) タバコを吸う生活も大切にするほうがよいと思う。	0.00 (0.00, 0.00)	0.00 (0.00, 0.00)	0.00 (0.00, 0.00)	
5) タバコを吸うと生活が楽しくなることもあると思う。	0.00 (0.00, 1.00)	0.00 (0.00, 1.00)	0.00 (0.00, 1.00)	
6) タバコを吸うと、からだや気持ちにいいこともあると思う。	0.00 (0.00, 1.00)	0.00 (0.00, 1.00)	0.00 (0.00, 1.00)	
7) タバコ吸うと、気分がスッキリすることもあると思う。	1.00 (0.00, 2.00)	0.00 (0.00, 1.00)	0.00 (0.00, 1.00)	
8) タバコを吸うと、頭のはたらきがよくなると思う。	0.00 (0.00, 0.00)	0.00 (0.00, 0.00)	0.00 (0.00, 0.00)	
9) お医者さんや学校の先生は『タバコを吸ってはダメ』と言いつぎると思う。	0.00 (0.00, 1.00)	0.00 (0.00, 1.00)	0.00 (0.00, 1.00)	
10) 灰皿が置いてあるところなら、タバコを吸ってもよいと思う。	0.00 (0.00, 1.25)	0.00 (0.00, 1.00)	0.00 (0.00, 1.00)	
KTSND-youth 総合得点	4.00 (2.00, 8.25)	3.00 (0.00, 5.00)	3.50 (1.00, 8.00)	*

中央値 (25%タイル, 75%タイル)

Kraskal Wallis test, \*\* p < 0.01, \* p < 0.05

配点法

「そう思う」3 「すこしそう思う」2 「あまり思わない」1 「思わない」0

質問項目 1) のみ逆採点

5. 考 察

1) 対象の特性：授業前70.1%の者が、周囲に喫煙者が「いる」と答え、喫煙者と身近に接する機会のある対象であった。父親の約4割、母親の約3割が喫煙者であり、これは先行研究に比べて同等<sup>7)</sup>～母親において高い割合<sup>11)</sup>であった。本調査は、全国的にみても成人男女の喫煙率が高い<sup>12)</sup>北海道という地域で行われたものである。母親の喫煙は中学生の喫煙経験および常習的喫煙率と関連<sup>13)</sup>、今後に向けて憂慮される問題である。子どもの周囲の喫煙者(成人)への禁煙介入には、職域や地域保健からの介入が相応するかもしれないが、受動喫煙が子どもの健康に影響することを考えると子どもの健康に携わる立場の者が喫煙防止教育を介して家族の禁煙に働きかける接近法がある。教育内容を家族と話し合うことを宿題とした事例<sup>7)</sup>、生徒自らが家族と話し合う事例<sup>14)</sup>があり、それらは両親の喫煙行動に変化を及ぼした。子どもの家族を含む喫煙防止教育は、学習成果を維持する環

境を整える点、そして喫煙者に対する費用対効果の高い禁煙活動という点でも有効と考えられる。子どもの周囲に高い割合で喫煙者がいる状況を考えると、今後の教育方法としては、家族を含む対象者の拡大、情報曝露の回数増を加えて検討が必要である。

今回、周囲の喫煙者の比率は、授業前70.1%から3か月後には61.8%と減ったが、無回答者も増え、周囲に喫煙する人がいない割合も授業前28.4%から3か月後33.8%に増えた。喫煙者内訳では両親の人数は増えていないが、祖父母が3か月後に増えていた。この数値が変動する理由は今回の質問項目のみでは解らなかつた。今後は子どものみならず、親に対しても調査を行うなどの工夫により実態を掴む必要がある。

2) タバコに対する知識と認知：小学4年生～高校生を対象とした調査研究<sup>11)</sup>によると、児童生徒の8割以上が喫煙によって「肺の病気になるやすい」「がんになるやすいこと」を知っており、本研究においてもほとんどの児童が喫煙の有害性を知っていた。しかし授業前は運動や学習能力に与える影響も含めて知っている割合は7割程

表4 授業後の感想

授 業 直 後			3 か 月 後
カテゴリー	サブカテゴリー	記述抜粋	記述抜粋
授業内容が印象に残る	禁煙を勧める外国CMが印象的	外国のCMがタバコをやめさせるには、抜群だと思いました	TV（どうが）がとても印象に残っている
	スモーカーズフェイスが印象的	長年タバコを吸った人の肌の写真が印象に残っています	
	有害性を示すタバコパッケージが印象的	印象に残っているのはタバコの箱の写真です	タバコのパッケージには、子供の写真や肺が悪くなった人の写真などがあったのでこれからもそういうのをつづけてほしい
	肺に溜まるタール模型が印象的	黒くてどろっとしたものが1年で肺に溜まると思うと気持ち悪い	1年間たばこを吸い続けた時の黒い液の量
	煙の広がりには驚く	タバコを吸った後に約1分間も（口から）煙が出ているなんてビックリした	タバコのけむりがひどく広がっていく動画を見てこわかったし、一番印象に残りました
	販売戦略を考える演習が印象的	若い人に物をいっぱい売る為と考えるところが面白かったです	
	禁煙を勧める演習が印象的	おじいちゃんたちにどうやったらやめられるか	周りの人がタバコを吸っていたら、「やめた方がいい」と言う方法を教えられたこと
	タバコを断る方法が印象的	タバコを誘われた時の断り方がためになりました	
タバコ関連の知識が増える	喫煙の有害性を知る	タバコを吸うと病気にかかりやすくなる。タバコを吸っている人だけでなく、タバコの煙を吸ってしまっている人も病気になりやすくなる	タバコをすうとのどやはいのびょうきになること
	タバコの依存症について知る	タバコを吸い続けると止められなくなる	タバコをやめたくてもやめられない気持ち
	禁煙治療について知る	タバコを病院で止められるということをくわしく聞いたので良かったな、と思った	タバコをやめるのに、あんなにたくさん薬があって、おもしろかった
	タバコの学習・運動への影響を知る	（喫煙と非喫煙/禁煙では）大学の合格率があれほど違うなんてと思いました	害がある（勉強や運動に悪い）ということを知り、前よりもっとタバコがいやに感じた
タバコに対する誤解に気づく	タバコがリラックスを招く誤解に気づく	タバコを吸った時とタバコを吸っていない人のリラックス感が同じなのに驚いた	タバコを吸って気分がよくなるのではなく、タバコを吸って気分が通常にもどっているだけで、日常ではリラックスがタバコを吸わない人より少ないということ
タバコを避けたい思いをもつ	家族に禁煙を勧める	親も吸っているから注意したい	
	喫煙したくない意思をもつ	絶対吸わない人生を選びたい	将来はぜったいに吸いたくないです
	再試行しない意思をもつ	タバコは一度吸ったことがあるから、もう絶対やめておこうと思った	
	受動喫煙に曝されたくない	お父さんにタバコを吸った後、1分くらいそこにいて、と言っときます	
禁煙に抵抗する思いをもつ	禁煙を勧めないほうがいい	あんまり禁煙、禁煙って言わない方が良いと思います	

度と低くなった。体に悪いという漠然とした知識があっても、経験のない具体的な悪影響を予測することは難しいと考えられる。今回、3か月後の調査では、受動喫煙の影響、依存性、運動・学習への影響も正答率が9割以上となった。教育学者ブルームらによる教育目標のタキソノミーの認知的領域では、最下位に知識があり、理解、応用、分析、総合、評価と位置づき、順に高次の認知的能力となると言われている<sup>15)</sup>。今回、授業で扱った写真や映像、模型などの教材、及び同級生や学校教諭のシナリオ演示について授業直後・3か月後の感想として印象に残ったこととして記していたことから、子どもは授業内容から得た知識を3か月経ても理解していたと考えられる。こうした授業方法は彼らの記憶に残り、認知プロセスを高次に進めたことへ貢献したと考えられる。

タバコに対する認知では、授業直後及び3か月後のKTSND総合得点の低下があった。特に授業直後にKTSND-youth総合得点が有意に低下したことは先行研究<sup>3) 6)</sup>と同様の傾向であった。ブルーム理論には、実際の学習過程において知識、理解から評価のように縦方向に整然と進む訳ではない批判<sup>15)</sup>もあるが、それに則ると授業を通じて子どもの理解が進み、そのことが価値判断のプロセスに影響し、タバコに対する認知の歪みが正されたと考えられる。しかし、高い割合で児童の周囲に喫煙者がいたことから、彼らの喫煙行動が変わらない場合、子ども自身の認知は喫煙を容認する方向に変化することが認知的不協和理論<sup>16)</sup>に則って考えられる。その為、KTSND総合得点が授業前と3か月後の得点間に有意差を生じることがなかったと考えられる。

今回の授業は、授業直後の感想で多くの児童が新しい知識を得た驚きを印象深い事柄として述べ、喫煙を避けたい意思を明記した者までいたため授業のねらいに合致した反応が得られたと考える。しかし禁煙に抵抗する思いをもった児童も少数ながらおり、既にタバコに対して心理的に依存している者にとって、繰り返しの質問紙調査は心理的抵抗(リアクタンス)<sup>17)</sup>を招いたと推測された。

本研究では、子どもが授業を通じ知識を得たことによってタバコへ依存する心理社会的な認知が低下したが、3か月後には授業前の認知の状態に近づくことが明らかとなり、教育効果を維持する教育方法の工夫が課題と考えられた。一方、研究の限界として、今回は教育介入群の前後評価という研究方法で、対照群をもたない調査方法であった。また、今回の喫煙防止教育以外の他の要因の効果を検討しておらず、交絡因子の検討も含め、今後、研究デザインの洗練と喫煙防止教育後の子どもの家族構成員に生じる反応についてもデータを蓄積する必要がある。

## 文 献

- 1) 内閣府：平成20年度青少年有害環境対策推進事業（青少年の酒類・たばこを取得・使用させない取組に関する意識調査）報告書。<2011.8.4 アクセス>  
[http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/yugai/pdf\\_index.html](http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/yugai/pdf_index.html)
- 2) 藤田 信：保健所管内の小・中学生を対象とした喫煙行動と関連要員に関する大規模調査研究（第3報） - 小・中学生の喫煙行動と保護者による養育状況との関連 - . 厚生指標 55: 31 - 39, 2008
- 3) Thomas R. E., Perera R. : School-based programmes for preventing smoking. Cochrane Database of Systematic Reviews, 1, CD001293, 2009
- 4) 加濃正人：タバコ病辞典 吸う人も吸わない人も危ない。埼玉県蕨市, 実践社, 2004, p389
- 5) 遠藤明, 加濃正人, 吉井千春, 他：小学校高学年の喫煙に対する認識と禁煙教育の効果。日本禁煙学会雑誌 2: 10-12, 2007
- 6) 星野啓一, 吉井千春, 中久木一乗, 他：加濃式社会的ニコチン依存度調査票を用いた小学校高学年および中学生における喫煙防止教育の評価 - 千葉県健康福祉部企画「喫煙防止出前健康教室」における調査 - . 日本禁煙学会雑誌2: 96-101, 2007
- 7) 中島素子, 三浦克之, 酒井貴子, 他：小学校高学年の喫煙に対する意識と喫煙防止教室の効果。北陸公衆衛生学会誌32: 73-78, 2006
- 8) 遠藤将光：小学校における禁煙教育の有用性について。禁煙科学3: 30-34, 2010
- 9) 笠原大吾：学校薬剤師の行う児童・生徒の発達段階に応じた喫煙防止教育 - 継続的喫煙防止教育の効果評価 - . 九州薬学会会報 64: 47-50, 2010
- 10) 今野美紀, 谷口治子, 土橋弘美：小学校6年生の喫煙に対する認識；薬物防止教育前・直後・3か月後の調査を通じて。北海道小児保健研究会会誌: 25-28, 2010
- 11) 高橋佳代子, 長谷川まゆみ, 池田範子, 他：児童生徒の喫煙状況と喫煙意識に関する調査研究 - 管内における平成16年度および19年度調査の比較 - . 厚生指標 56: 9-15, 2009
- 12) 厚生労働省:都道府県別にみた基本健康診査における喫煙率。<2011.8.17 アクセス>  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/c-hoken/07/toukei2.htm>
- 13) 前掲4) p387-388
- 14) 奥田恭久：週刊タバコの正体。禁煙科学 1: 14-17, 2007
- 15) 梶田叡一：教育における評価の理論 学校学習とブルーム理論。東京, 金子書房, 1994, p143-157
- 16) Festinger, L. / 末永俊郎：認知的不協和の理論 - 社会



今野美紀、浅利剛史、蝦名美智子、田畑久江、谷口治子

心理学序説．東京，誠信書房，1965，p4-32

- 17) Brehm J W: Psychological reactance: theory and applications. *Advances in Consumer Research* 16 : 72-75, 1989